

保育の心理学

< 発達観と保育観 >

○現在の発達観

- ① 生涯発達 … すべての人間は生涯発達し続ける（バルテスやエリクソンの理論）
- ② 相互作用 … 子どもの発達には文化や環境、大人や友人などの影響の中進む（ヴィゴツキーの理論）
- ③ 個人差 … 発達のスปีドや経路は子どもによって異なる

乳幼児期、生涯にわたる生きる力の基礎が培われる

※ **生きる力を育む**…保育者は生活と遊びを通して発達を支える

- ① よりよく問題を解決する資質や能力
- ② 自らを律し、他人とともに協調し他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性
- ③ たくましく生きるための健康や体力

レジリエンス … 「自発的治癒力」「復元力、回復力、弾力」

「困難な状況にもかかわらず、しなやかに適応して生き延びる力」

< 保育所保育指針“8つの発達過程” >

8つの区分	キーワード
① おおむね 6か月未満	特定の大人との情緒的な絆
② // 6か月～1歳3か月	座る～歩くへ 愛着と人見知り 活発な探索 言葉の芽生え 離乳 の開始
③ // 1歳3か月～2歳未満	行動範囲の拡大 象徴機能ができてくる 周囲の人への関心
④ // 2歳	基本的な運動機能 言葉を使う喜び 自己主張
⑤ // 3歳	基本的な生活習慣の 形成 言葉の発達 友達との関わり ごっこ遊びと社会性 基本的な運動機能が伸び、食事・排泄・衣類の着脱などほぼ自立
⑥ // 4歳	全身のバランス 環境への関わり 想像力の広がり 葛藤 自己主張と他者の受容
⑦ // 5歳	基本的な生活習慣の 確立 運動能力アップ 集団行動と仲間 思考力芽生え
⑧ // 6歳	たくみな全身運動 自主と協調の態度 思考力と自立心の高まり 役割分担

発達過程 … 子どもが辿る発達の道筋や順序性にみられる共通の姿 発達の連続性

※重要

<発達を規定する要因>

保育者としては、発達は遺伝的要因と環境的要因の相互が作用し合うものとして捉えることが望ましい！

遺 伝 → ゲゼル

- ・ 成熟優位説
- ・ 経験では補えない
- ・ 成熟 = 遺伝的な資質が発言して発達
- ・ レディネス = 内的準備状態 学習が成立するために必要な発達の素地
- ・ 年齢相当の運動機能が成熟して学習が成立する

保育者の役割:「レディネス」が形成されるのを待つ

環 境 → ワトソン

- ・ 環境優位説
- ・ 「アルバート坊やの実験」…白いねずみを怖がる(恐怖条件付け)
- ・ 遺伝的な要因にかかわらない
- ・ どのような行動も学習によって学習が成立(行動主義)

遺伝と環境

シュテルン

- ・ 遺伝的要因と環境的要因の加算 互いに作用し合うのとは違う！
- ・ その両者が独立し総和したもの(収束して発達) = 輻輳説(ふくそうせつ)

ルクセンブルガー

- ・ シュテルンの輻輳説を図式化

ジェンセン

- ・ 遺伝的要因が現れるために一定の環境的要因が必要
- ・ 必要な環境的要因の質や量は、遺伝的要因の特性によって異なる
- ・ 相互作用説そのなかでも特に>環境閾値説(かんきょういきちせつ)

■さらに詳しく

ゲゼル : 生得的に内在する能力は時期に応じておのずと展開し、発達する 準備が整い一定の発達段階に達していないと特定の行為はできない(成熟優位説=レディネスの成熟)

ワトソン : 刺激に対して反応する条件付けを「学習」すればどのような行為でも可能になる**行動主義**。
オペラント条件付けを応用(強化学習)

今日の心理学に大きな影響！

シュテルン : 遺伝+環境⇒両者が輻輳する(輻輳説) * 相互の加算的な考え方

ジェンセン : 才能が開花するにはある程度の環境要因が必要 どれくらい必要かは個人(遺伝)によって異なる(環境閾値説) * 相互作用的な考え方

< 発達の評価と研究法 >

① 観察法

- ・ 自然的観察法…ありのままの状態を観察
- ・ 参与観察…観察者が現場に参加しつつ観察(保育においてよく用いられる)
- ・ 実験的観察法
- ・ 心理検査

② 面接法…直接対面

- ・ インタビュー…情報収集
- ・ カウンセリング…心理的援助
- ・ 遊戯療法…言語でなく遊戯を媒体とした心理療法(言語表現が苦手な児童を対象)

③ 双生児研究・家計研究法…遺伝と環境の影響を研究

④ 横断的方法…一時点での**多数**の観察、発達状態を比較し検証(ハサミの使い方)

⑤ 縦断的方法…**少数**の観察、時間による変化を**定期的**に観察検証(ハサミの上達具合)

⑥ 比較文化的方法…異なる地域や文化、民族間の発達の違いを比較

< 感覚機能の発達 >

① 触覚…皮膚感覚…胎生3か月(妊娠8週)頃発達をはじめる

胎生4・5か月～指しゃぶり 口唇部(こうしんぶ)から頭部、尾部(びぶ)に向けて発達、
圧覚、痛覚、温度覚が出生時から存在する

② 味覚…新生児期～白湯より糖水の方を好む

③ 嗅覚…出生後すぐに母乳の匂いを嗅ぎ分ける

④ 聴覚…胎児が胎内で様々な音に反応 胎生6か月～機能しはじめ、胎生7・8か月～聴力がある

⑤ 視覚…光覚は胎生8か月(28～30週)頃に認められる 固視機能が生後1週間で認められる

< 妊娠期の胎児の成長 >

妊娠(3か月)8週～皮膚感覚

妊娠4・5か月～指しゃぶり

妊娠(6か月)20週～羊水を飲む、味覚が発達

妊娠(6か月)20週～音刺激に反応

妊娠(8か月)28週～光に反応⇒(出生後、生後6か月くらいでやっと大人に近い視力へ)

○触覚3か月ころ → 聴覚6か月から → 視覚8か月ころ → 情

< 中枢神経系の発達 >

新生児350g(大人の25%)

大人約1300～1400g

- ・ 脳細胞の数は出生時にはほぼ揃っている(脳細胞が増えるわけではない)
- ・ 脳の重量が増加するのはグリア細胞の増加と脳細胞同士の連結が密になるため

<運動機能の発達>

○原始反射…生命維持に必要な出生直後からみられる適切な行動 ⇔ 随意運動

- ・探索反射：首を回して乳首を探す(生後～3.4か月まで)
- ・モロー反射：音・光等の刺激で両手両足を広げた後、抱きつくようにする(生後～3.4か月)
- ・把握反射：手のひらに触れた物を強く握る(生後～3.4か月まで)
- ・吸啜反射：(きゅうてつはんしゃ)唇に触れた物を吸おうとする(生後～4.5か月まで)
- ・緊張性頸反射：仰向けに寝ている赤ちゃんの顔を横に向けると、顔が向いたほうの手足は伸びて反対側の手足は曲がる(生後～5.6か月まで)
- ・バビンスキー反射：扇状に足の指が開く
- ・そのほか 自動歩行反射

生後4か月前後、遅くても1歳までに消失する 長く残る場合中枢神経系の発達の遅れを疑う

○バランス感覚…4歳頃、全身のバランスをコントロール(跳ぶ、はねる、片足で立つ)

○粗大運動(姿勢と移動運動に関する技能)

移動運動… 6か月～1歳3か月頃 寝返り・ハイハイ・つかまり歩き

→ 探索行動… 1歳3か月頃 不慣れな場所を独力で歩く

→ 2歳頃 転ばずに走る

○微細運動(手足を用いた精密な動作)

協調運動(目と手を強調させて同時に行う動作)生後6か月を過ぎると物をつかむ

<乳幼児期の感情の発達と自己抑制>

1歳6か月頃～⇒自分と他人の区別がつく(自己意識が芽生える)鏡に写る姿を見て恥ずかしがる等

2歳頃～⇒自己主張 4・5歳までに落ち着く

2歳頃～⇒自己抑制 6・7歳頃まで発達し続ける

自尊心…肯定的な評価のあり方⇒成功体験を積む(他者から肯定してもらうことで自信に繋がる)

防衛機制…無意識にストレスから身を守る

- 主な防衛機制
- ・退行(低い段階に後戻り)
 - ・抑圧(不安や嫌な事を排除)
 - ・逃避
 - ・合理化(自分を正当化)

<言語の理解>

乳幼児 … 指差し(身振り表現の代表)

生後6か月頃 … 単純な関係 二項関係(自分とオモチャ)

生後9か月頃 … 共同注意(対象を指差して親と共有) 三項関係(自分とママとオモチャ)

象徴機能(見立て遊び等:今ココに無い物をイメージ化して言葉や身振りで代理させる)が発達
言語コミュニケーションの基礎となる

<言葉の発達過程>

初めての音声は産声！

生後1か月頃～	クーイング(「アー」の音を鳴らすような音声)
生後4か月頃～	喃語
生後6か月頃～	反復喃語
1歳頃～	初語(しょご)・一語文
1歳6か月頃～	二語文
2歳頃～	語彙爆発、三語文へと複雑な構文で自己主張
3歳以降	外言から内言へ 独語(会話の為の言葉) スクリプトを言葉にする。 文脈や社会場面によっては言葉遣いを変える
～5・6歳まで	反響語(オウム返し)、独り言、自己中心的言語が多い

スクリプト …日常生活で起こりうる状況を理解し適切にふるまうよう定型化された知識のこと
出来事の順序に関する知識を子どもの発達に合わせて視覚的に示すと有効

<発達に関する考え方> ※重要

ピアジェ	エリクソン	ヴィゴツキー
同化と調節によりスキーマを変容 認知(思考)の発達段階 幼児の独語は自己中心的言語	ライフサイクル論(8つの危機段階を乗り越え段階に応じて獲得し次の段階に行く) 自我同一性の理論	発達最近接領域 (個人差を見極めて支援) 独語は外言から内言へ内在化 (会話のための言葉から思考のための言葉へのプロセス)

*教育、保育において重要な考え方
保育者の役割:個人差を見極めながら支援を行う

<幼児期の発達の特徴>

- 6か月までに:首座り
- 7か月～1歳までに:座る、這う、立つ
- 1歳3か月までに:歩く
- 2歳ごろ:転ばずに走る 指先の動きが急速に発達(微細運動)
- 3歳ごろ:生活習慣の形成
- 4歳ごろ:全身のバランス感覚
- 5歳ごろ:基本的生活習慣の確立 活発な運動遊び

< 認知や思考に関する発達段階 >

ピアジェ：同化(アシミレーション)と調節(アコモデーション)によりシエマ(窓枠・枠組み)に変容
 (体験したことをシエマに取り入れる ⇒ 既存のシエマに合わない体験をしたらシエマを変えていく)
 シエマ … 繰り返し使用される行為のパターン、または、その行為を行う心的構造のこと

■ピアジェの認知発達段階 **※重要**

<p>①感覚運動期</p> <p>感覚と運動の協応によって新しい場面に適応していく</p>	<p>0～2歳頃</p> <p>反射的行動とは違う動き</p>	<p>直接的な感覚・運動体験からシエマを発達させる 同じ行動を繰り返し(循環反応)さらに複雑化させていく</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 反射期(0～1か月)：生得的な反射で反応 新生児反射 2. 第一次循環反応期(1～4か月)：自分の身体部位に向けられた行動を連続的に繰り返す(指しゃぶりなど) 3. 第二次循環反応期(4～8か月)：偶発的な対象操作を繰り返す(モノを壁に投げる等) 目と手の協応動作の発達 4. 2次的シエマの協応期(8～12ヶ月)：対物の永続性が理解できる(目的に応じて手段をとる) 5. 第三次循環反応期(12～18ヶ月)：手段を変化させることによって結果の違いを調べられる 6. 心的対象の発言(18～24ヶ月)：目的と手段の関係をイメージでき、<u>新しい手段</u>を発明する 簡単なカテゴリー化 <p>*2歳ごろに象徴機能を獲得することで次の段階へ移る (カテゴリー化)</p>
<p>②前操作期 前概念的思考 (象徴的)</p> <p>概念形成が不十分</p>	<p>2～4歳頃</p> <p>幼児期の思考の特徴</p>	<p>見立て遊び、ごっこ遊び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自己中心性(自分と他人の違いが理解できず他者の視点をとることができない) ・フェノメニズム(見かけに左右される・見かけだけで判断) ・アニミズム(すべてのモノに命がある) ・相貌的知覚(壁のシミが顔に見える) ・人工論(なんでも人間によって作られたもの)
<p>②前操作期 直感的思考</p>	<p>4～7・8歳頃</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・概念化: イメージと概念が結びつく(プードル=動物) ・知的リアリズム(直感的で自分の知っていることにとらわれ正しく判断できない)
<p>③具体的操作期</p>	<p>7・8歳～11・12歳</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・メタ認知(自分の思考過程をモニターする) ・「保存の概念」を獲得する 長さ・量・数 7・8歳 面積・重さ 11・12歳 ・見かけの変化にまどわされずに判断できる
<p>④形式的操作期</p> <p>言語によって推理し一般的原理を発見できる</p>	<p>11・12歳～14・15歳</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・論理的思考(人の思考・知能の発達段階としての到達地点) ・仮説演繹的思考(かせつえんえきてき): 想像上の問題も考えることができる(記号だけを用いても考える) ・創造的活動(自由に概念・知識・イメージを頭の中で操作することが可能)

<愛着の発達>

ボウルビイ：イギリスの児童精神科医 母親と子どもの情緒的絆の重要性を示した

愛着:アタッチメント…

乳児からの愛着行動に、養育者がいち早く一貫した応答を繰り返すことで基本的信頼感を獲得していく。

○ボウルビイの愛着理論の4段階

- ①初期の愛着段階：出生～12週頃 人物を問わず目で追う(注視行動)
- ②愛着形成段階：12週～6か月頃 特定の人物にほほえむetc自分に引き付け(信号行動)
- ③明確な愛着段階：6か月～2・3歳頃 特定の人物への**接近行動** 人見知り
安全基地を確立したら**探索行動**へ
- ④協調関係の段階：3歳前後～ 養育者の状況を推測して自分の行動を調節できる
(注視・信号・接近などの愛着行動は弱まっていく)

ホスピタリズム(施設病)…

ボウルビイが観察、母性的養育が必要な理論的根拠となった

一貫して応答する養育者が存在しないと母性剥奪(はくだつ)状況となる



母性剥奪…乳幼児と養育者との親密な人間関係が欠けること

生理的要求が満たされても心身の発達や情緒的、対人関係な面の発達に遅れやゆがみを生じさせる

ハーロー：接触刺激の重要性を示し、愛着対象は安全基地として機能する(アカゲザルの実験)

エインズワース：アメリカの心理学者

ストレンジ・シチュエーション法…親子間の愛着の質を調べるための実験法

1歳前後の幼児を対象

見知らぬ他人の入室→子どもを残し母親が退室(分離)→母親が入室子どもと再会

○エインズワースのストレンジ・シチュエーション法

愛着パターン

- ① Aタイプ(回避型)：母に無関心
- ② Bタイプ(安定型)：他人の存在が気にならない、分離で混乱し、再開で安心
- ③ Cタイプ(アンビバレント型)：分離に混乱し再会でも不安収まらず怒りや抵抗

両面

※各タイプに分化差があり、必ず問題が生じるわけではないが、その後の人間関係の持ち方に影響を与える

< 乳児の社会性の発達 >

- 新生児 : 生理的微笑
- 3か月 : 3か月微笑(あやしてくれる人にほほえむ) **スピッツ**
- その後 : 社会的微笑 (周囲からの、特定の養育者からの働きかけに応じあやすと笑う)
- 8か月 : 8か月不安 (人見知り) ⇒ 愛着関係を築いた証拠

< 幼児の社会性の発達 >

2歳まで	大人との情緒的な絆ができる 物を介して他児とのやりとりが始まり追いかけてっこなどをする
2歳頃	相手の気持ちになって考えることができない。反抗したり自己主張がみられるようになる
3歳頃	特に仲の良い何人かのグループができ一緒に遊ぶ 性役割が自覚される
4歳頃	仲間とのつながりが強まるなか、自己主張がみられ競争心や喧嘩も多くなる
5歳頃	決まりやルールを守ることを覚える。集団行動ができ共通の目的を持って遊びを楽しむ
6歳頃	仲間同士に認められることや一員であることの喜びを感じる。役割分担が生じるようになる

L・ファンツ

選考注視法 … 乳児は知らない物を注視する傾向があり顔に似た図形を好む

プレマック

「心の理論」 … 相手の気持ちを推測するために必要な能力 (チンパンジーの研究)

サイモン・バロン＝コーエン (サリー・アン課題の研究)

誤信念課題 … ある事物を見た人とそれを見ていない人との心的な差異はどのようなものかを答える課題

- ・おおむね**4歳ごろ**から「心の理論」を発達させ始める
- ・自閉症児の特徴を「心の理論」の障害と考えた

パーテン

遊びの分類…子ども同士の関係性 **※重要**

- ① 2歳頃まで : 一人遊び
 - ② 2歳半頃 : 傍観…近くで見ている
 - ③ 3歳頃 : 平行遊び…お互いにやりとりはみられない
 - ④ 4歳頃 : 連合遊び…やりとりしながら同じ遊びをする
 - ⑤ 5歳頃 : **協同遊び**…目的を共有し、役割分担しながら遊べる
- ↑もっとも高い発達水準

< 集団の分類 >

- ① 幼児期の集団…男の子なのか女の子なのか**性役割が自覚**され言葉遣いや態度にも現れる
- ② 児童期の集団 「**ギャンググループ**」…男の子同士、ルール破りで一体感を得て結束力の高い集団
- ③ 中学生頃の女の子集団 「**チャムグループ**」…興味や関心など類似性を確認し合い同質性を求める
- ④ 高校生以降の青年期の集団 「**ピアグループ**」…価値観や理想を議論し異質性を認め合う

< 道徳性の発達…慣習段階 >

アイゼンバーグ

向社会的行動…報酬を期待することなく、自発的に人々のためになることをしようとする行動(5歳頃から)
相手の気持ちに気づき思いやることを通じて発達し内面化していくと考えた

コールバーグ

モラルジレンマ方法 … ジレンマ状況から道徳的判断の発達について調べた

コールバーグの道徳的判断の発達段階 = 正義+公正 (正義が偏りすぎるとの批判もある)

- ・水準Ⅰ 前慣習的段階…①罰を逃れるため従順志向 ②自分の損得のため快楽主義、見返りの恩恵
- ・水準Ⅱ 慣習的段階…③人間関係の維持、他者への同調、よい子志向 ④義務感による法と秩序の維持
- ・水準Ⅲ 脱慣習的段階…⑤自律と社会的公平性 ⑥ 人間の尊厳の尊重

人間の尊厳の尊重が正しさの基準 向社会的行動の発達の**最終の⑥段階**

< 社会的視点取得の発達 >

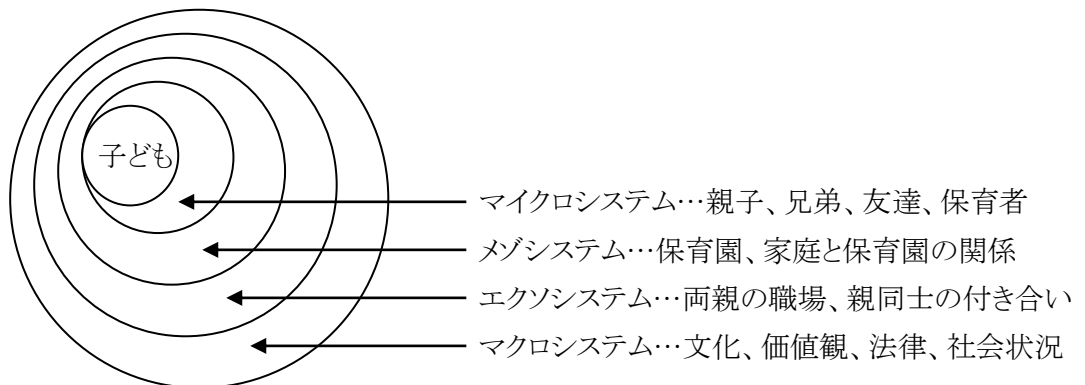
セルマンと**バイレン** : 社会的視点取得の発達段階を研究し示した

幼児期に自分と他者の視点を理解することは難しい

社会的視点取得 … 他者の考えや感情、視点を理解する能力

< 社会的相互作用 >

Bronfenbrenner : 子供と環境の相互作用を同心円状で表現 人間を取り巻く環境は入れ子構造と考え、**エコロジカルシステム**という概念を提唱



ヴィゴツキー ※重要

最近接領域 … 「自力で解決できる水準」と「周囲の援助でできる水準」の境界のこと

この二つの水準の間に働きかけることで精神間機能 (他者の援助があれば出来る) を

精神内機能 (自分一人で出来る) に変えていくことができる

「みなで一緒にやれば出来る！」

< 初期経験の重要性 >

ローレンツ

インプリンティング … 特定の時期に特定の刺激によって生じた反応が半永久的に消失しない現象
(反復的な学習や経験が無くても一度の学習で成立、刷り込み)

「臨界期」…ある時期を逃すと獲得した後に修正が効かない

「敏感期」…学習や獲得に有利な時期

人間の出生の発達においては臨界期が在るか否かについては議論がある

愛着関係の形成などについては敏感期に働きかけることで取り返しがつかないことはない

ポルトマン

生理的早産 … 人間は未成熟な状態で生まれる

「二次的就(留)巢性」 … 生後一年間の乳児の状態(子宮外胎児期)

感覚は母体内で発達し、運動機能は誕生後に発達する

離巢性(早熟性:哺乳生まれて直ぐ巣立つ乳類や鳥類)

留巢性(晩熟性:短い妊娠期間で生まれ未成熟なため一定期間巣のなかで保護)

トレヴァルセン : 生後5~6週間にみられる情動的な一体関係が成り立つ一次的間主観性 と
生後6か月以降にみられる相手の意図を把握する二次的間主観性 を 区別した

< 生涯発達の概念を提唱した人々 >

バルテス : 生涯発達心理学を提唱

生涯発達 … 「受精してから死に至るまでの心身の変化」 固体の発達

ハヴィーガースト : 「発達課題」を達成しないと次にうまく進めない

エリクソン : 自我同一性(アイデンティティ)の理論と8つの発達段階

それぞれの発達段階に個人の欲求と社会的要請との対立による社会的危機がある

フロイトの思想を受け継ぐ 漸成的発達理論

ライフサイクル … 出生から死に至る過程において人が一定の段階をたどり次世代に生命を受け継いでいくこと

○エリクソンの人生周期 **※重要覚えること!** エリクソンは幼児期を前期と後期に分けて考えた

発達段階	年齢	発達課題 と 危機	何を得る
①乳児期	0～1歳頃	基本的信頼 vs 不信	希望
②幼児期前期	1～3歳頃	自律性 vs 羞恥・疑惑(恥・疑惑)	意志
③幼児期後期(遊戯期)	4～6歳頃	自主性 vs 罪悪感	目的
④学童期	6～12歳頃	勤勉性 vs 劣等感	能力
⑤青年期	12～22歳頃	自我同一性(アイデンティティ) vs 自我同一性拡散	誠実
⑥成人期前期(成人初期)	22～30歳頃	親密性 vs 孤独(孤立)	愛
⑦成人期中期(成人期)	30～65歳頃	生殖性(世代性) vs 自己陶醉(停滞)	世話
⑧成人期後期(老年期)	65歳頃～	自我の統合 vs 絶望(嫌悪)	知恵

<胎児期と新生児期の発達>

- ・胎生期
 - ・細胞期 2週間～
 - ・胎芽期 3週間～8週間
 - ・胎児期 3か月頃～出生
- ・新生児期 出世後28日未満

多相性睡眠…新生児期 こどもは、レム睡眠が多い(睡眠中多くはウトウトして浅い眠り)

单相性睡眠…昼は覚醒・夜は睡眠(5～10歳頃になると睡眠中レム睡眠とノンレム睡眠を交互に繰り返す)

○母体からの影響…**身体的機能が形成されるのは、妊娠初期の胎芽期**

○母体の飲酒や服薬…血中のアルコールや薬物が胎盤を通過して胎児にまで届く

胎児性アルコール症候群

- ・出生前及び出生後の発育障害、発達遅延
- ・中枢神経系の機能不全、障害
- ・頭部顔面域の形成障害

○母親の喫煙…血中のニコチンや一酸化炭素によって、胎児が酸素欠乏

低出生体重児 2500g以下のリスク2～4倍

○母親の心理的問題…

マタニティブルー(母親の出産後の抑うつ) 継続的な支援が必要・子どもとの相互作用に大きな影響

* 歩行の発達は 頭部から脚部へ 進む

* 身体的能力は 中心から抹消へ 進む

* 精神的能力は 具体的思考(目の前にあるもの)から抽象的思考(頭の中のイメージ)へ 変化する

<発達>

①乳児期「基本的信頼感」(1か月～1歳前後)

養育者との間に結ぶ愛着関係で**希望**を持つ⇔不信

出世後の一年間で 体重約3倍 身長1.5倍

首のすわり(6か月頃) → 座る、這う、立つ → 歩く

“初語”意味のある言葉(7か月～1歳頃)

物の**永続性**(見えなくても存在)、**同一性**(一度に一つ存在)、**恒常性**(一定)を理解

②幼児期前期「自律性」(1～3歳頃)

1歳半～第一次反抗期 → **意志**を持つ

親への反抗を許し、支援することで自分を制御できるという感覚(自律性)を獲得する。⇔羞恥

それが許されないと「自分はできない」という恥の感覚に圧倒される

③幼児期後期「自主性」(4～6歳)

遊戯期(ごっこ遊びの中で自分はこうありたいと**目的**感覚を持つ)⇔罪悪感

逆に「自分を悪い子だ」と感じることで委縮する

対人葛藤…4～5歳頃、自己調整能力を学ぶ機会 社会的スキルを獲得する要素

④学童期「勤勉性」(6～12歳) 具体的操作期

課題→達成→有能さを確認(**能力**)⇔失敗すると劣等感

保存の概念：形や置き方などの見方が変わっても、数や量は変わっていないと理解できる

内発的動機付け：外からの要因に依存せず興味や関心で学ぶことが喜びになり行動をおこす

メタ認知：自己の状況をモニタリングすることによって推測的に他者の状況を知り自己の状況をコントロールすることが可能

思考過程や行動をモニターし結果を予想し分析し適切な評価をする

ギャンググループ：強い仲間意識・集団内の規範・欠点や長所を自覚

⑤青年期(12～22歳) 形式的操作期

「自我同一性」⇔アイデンティティの拡散、第二次反抗期

第二次性徴：声変わり、発毛、初潮

仮説演繹的思考：抽象的な内容についても論理的に思考

脱中心化：世界は必ずしも自分の思い通りになるわけではない

ピアグループ：意見をぶつけ合い、異質を認め合う

マーシアのアイデンティティ・ステイタス

同一性地位	葛藤(クライシス)	積極的な関与・介入(コミットメント)
① 同一性達成	経験した	している
② モラトリアム	クライシスの最中	コミットメントしようとしている(迷う)
③ 早期完了	経験無し	不協和は無く、幼児期以来信念を補強
④ 同一性拡散	経験したorしていない	していない

青年期以降も**再構成**が繰り返される(達成→拡散→モラトリアム→達成などを繰り返す)

早期完了…(例)家業の跡継ぎ、子どもの頃からの夢をかなえた人

⑥成人期前期「親密性」(22～30歳)

ふさわしいパートナーと**親密**な関係を築きライフスタイルを確立⇔孤立

⑦成人期「生殖性」「世代性」(30～65歳)

職場・家庭においても次の世代を守り育む⇔自己陶醉・停滞

ユング

「人生の午後」…中年期(40～60歳)自分を見つめ直す「**個性化の時期**」(スイスの精神科医)

人生を振り返り自分のアイデンティティを再体制化

⑧成人期後期(65歳～)

自我の統合(自分の人生に価値があった)⇔退職や身体能力の低下 喪失体験 絶望

ターミナルケア(終末期医療)… 老年期のクオリティ・オブ・ライフ

死の受容のプロセス 否認→怒りや悲しみ→運命と取引→抑うつ→受容

< 発達アセスメント(査定) >

・発達検査…①遠城寺式 ②デンバー式 ③新版K式

・知能検査…①ビネー式(一般知能) ②ウェクスラー式(IQの他に 群指数から詳しい結果が分かる)

$IQ = \text{精神年齢} \div \text{生活年齢(実際の年齢)} \times 100$

* IQ知能指数70以下で知的障害

< 重要な個人差 >

トマスとチェス : 生まれつきの気質を研究。(例)扱いやすい子の特徴・立ち上がりの遅い子etc

同じ子どもの乳幼児期と青年期にどのような気質を持っているかの調査

子どもの気質と保護者の養育姿勢の組み合わせが適切であれば子どもは順調に育つ

< 待つ保育と働きかける保育 >

待つ保育…レディネスが形成されるのを待つ(ゲゼルの成熟優位説に立つ発達観)

働きかける保育…個人差を見極めながら大人の支援(ヴィゴツキーの最近接領域に働きかける発達観)

< 保育士の実践計画 >

保育課程…保育所全体の保育方針、目標を含む根幹となる計画

指導計画…保育計画を具体化する実践計画 長期(年・期・月)と短期(週・日)に分けられる

< 環境としての保育者 >

- ①「人的環境」…物的環境・自然・社会の他に子供の発達を支援する者(保育者)や他の子どもたち
- ②「安全基地」…保育者が帰れる場所となる。子どもは保育者との関わりの中でありのままの自分を認められ主体的に関われる。
タッチケア(身体接触を伴うなぐさめ、見つめ、語り、素肌に触れる、なでる)

- ③「環境調整」…子どもにとって有益な環境を計画・工夫!

■ 保育所保育指針における保育の環境

- ・子ども自らが関わる環境
- ・安全で保健的な環境
- ・暖かな雰囲気と生き生きとした活動の場
- ・人との関わりを育む環境

< 環境との相互作用 >

JJ.ギブソン

アフォーダンス … 環境との相互作用において、環境自体が価値を持っていること
 保育の環境設定＝子どもに何をアフォードするのか、その視点から捉え直す
 (例)『椅子』大人にとって、「座ること」をアフォードする
 子どもは、「下にもぐる」・「足をブラブラ」・「逆さまにして運転席」をアフォードする

ガードナー

多重知能理論 … 一人ひとりが得意な知能を発揮するとき豊かな保育実践がなされる

レイチェル・カーソン

『センス・オブ・ワンダー』 … 未知の現象への驚き、自然の不思議を体験

<モチベーション(動機付け)の種類>

- 生理的動機付け … 本能 生得的な動機
 外発的動機付け … 怒られる ほめられるといった外からの働きかけ
 内発的動機付け … 子どもの自由な好奇心から行動を促す

ブリッジス : 情緒の出発は新生児の興奮にある

<子どもの生活と学び>

ワトソン : 人間が生まれた時は「白紙(タブラ・ラサ)」の状態 全ての行動を学習して身につける
行動主義心理学 環境優位説の立場



ひきつぐ

スキナー : プログラム学習 … 強化学習(オペラント条件付け)を用いた段階的な学習法

- ① スモール・ステップの原理: 目的までのステップを細かく分ける。段階的に身に付ける
- ② 即時フィードバックの原理: 行動の強化は間をおかず、すぐ行う
- ③ 積極的反応の原理: 子どもが自ら行動し、積極的に反応する
- ④ マイペースの原理: 自分のペースで学習

ブルーナー : 発見学習 … 子どもの積極的なかかわりと発見のプロセスを重視
内発的動機付け … 自由な好奇心で学習が進められる

- ①課題の把握⇒②仮説の設定⇒③仮説の検証⇒④まとめ

バンデューラ : **モデリング(観察学習)**… 模倣や観察から社会のルールを学ぶ
社会的学習理論 自己効力感の研究

(例) 子どもは大人のマネをしたがる…細かい癖や習慣まで

<遊びの分類>

① パーテン(社会的参加)

- ・一人遊び
- ・傍観
- ・平行遊び
- ・連合遊び
- ・協同遊び

② ビューラー(心的機能)

- ・機能遊び… 感覚遊び
- ・受容遊び… 絵本
- ・模倣遊び… 想像あそび
- ・構成遊び… 積み木 工作

③ ピアジェ(認知発達)

◇認知発達の水準を把握◇

- ・実践遊び… 五感と運動機能が興味の対象 身体感覚を繰り返し体験(0~1歳半)
- ・象徴遊び… 象徴機能を獲得した後の見立て遊び・ごっこ遊び(2歳~)
- ・ルール遊び… 具体的操作期→ルールに従う、作る、修正する(4歳~)

< 食事・睡眠・排泄・整容に関する発達時期 >

【食事】

離乳: 5~6か月
 自分で食べようとする: 1歳
 コップ・スプーンが使える: 1歳半
 ひとりで食事: 3歳6か月

【清潔】

自分で手洗い: 2歳6か月
 自分で洗顔・歯磨き: 4~5歳

【睡眠】

寝る前・起きた時のあいさつ: 2歳
 促されればねる前にトイレに行く: 3歳6か月
 自分で寝る前にトイレに行く: 6歳 午睡の習慣なくなる

【排泄】

排尿の自立: 3歳6か月~4歳
 夜尿がなくなり、排便が自立する: 4~5歳

【衣服着脱】

自分で着衣しようとする: 1歳半
 靴・帽子をつけられる: 2歳半
 ボタン・靴下: 3歳6か月 ←必要: 手先の微細運動 と 目と手の協応

< 自己観の発達 >

- ・乳幼児期の自己観 → 他者との関わりの経験を重ねながら自己観が形成される
 3歳頃に一人称、二人称表現が現れる
 4歳頃に自意識が芽生える
 欲求不満耐性・問題解決能力を身に付ける 我慢や困難を経験する
- ・児童期の自己観 → 自分自身の特徴や役割がわかる
 より抽象的な広い視界で自分をとらえることができる
- ・青年期の自己観 → アイデンティティの確立の時期
 自分自身の特徴に気づきそれを受け入れることが必要となる

< 心理学における学習 >

- 古典的 条件づけ … 受動的(反射的)な反応 ある刺激を受けると、本来それとは無関係な反応を引き起こしてしまう条件づけのこと
 例: 梅干しを食べると唾液が出ていたが、じきに梅干しを見ただけで唾液が出る
- オペラント条件付け … 能動的(自発的)な反応 ある行動をした結果、環境がどう変化したかを経験することによって、環境に適応するような行動を学習すること

<心理学の造語>

- 選択的聴取能力 … 新生児に備わっている能力 様々な音や声に同じようには反応しない
- 情 動 伝 染 … 生後数日の乳児が、他児の鳴き声を聞いてつられて泣くこと
- 共 鳴 動 作 … 新生児が無意識に大人と同じ表情をすること
- 感 情 伝 染 … 母親の様子や声の調子に誘発されて生じる乳児期前半からの反応
- ハンドリーガード … 自分の手を目の前にかざしてじっと見つめる
- 共 同 注 視 … 6か月～0歳後半には視線や指差しで自分と他人が何を見ているか相互了解する
- エントレインメント … 新生児が養育者の話しかけに反応して同調的に体を動かすこと(同期行動)
養育者もそれに同調し呼び掛け続けること **コンドン** と **サンダー**
- 一 次 的 感 情 … 誕生時の原始的感情「充足・興味・苦痛」+生後3か月の感情「喜び・悲しみ・嫌悪」
+生後6か月の感情「驚き・怒り・恐れ」をひとくりに定義
- 内的ワーキングモデル … 幼児は愛着対象の養育者をイメージすることで安心感を得る
- 社 会 的 参 照 … 自分の行動の指針として人が表情や視線から様々な情報を得ること
生後9か月頃から他者の真似
1歳前後の幼児が判断に迷うとき特定の養育者の表情を手掛かりにする
(**エレノア・J・ギブソン** JJギブソンとは夫婦と**クォーク**の視覚的断崖の実験)
- 繰り返し行動 … 探索行動により新しく知ったり理解できたとき喜びを表現しさらに行動を続ける
- 役割取得能力 … 他者の置かれた立場を自分に当てて想像する 他者の感情を推察する
- 帰 属 意 識 … 自分がある集団に属し、その一員であるという意識
- 共 感 性 … 他者の感情状態を知覚し、自分も同様の感情状態を経験すること
援助行動などの向社会的行動を動機付ける重要な要因 Hoffman
- 社 会 的 比 較 … 小学の中高学年では他者との比較により自己を評価することが多くなる
そのことで自分の明確な位置づけをする
- リ テ ラ シ ー … 保幼小連携のもと小学校教育では文章で表現することなどの能力を身に付ける
- 小1プロブレム … 学校生活になじむことが困難な児童
- 空の巣症候群 … やれることを見出せず抑うつ状態になってしまうこと
子どもが巣立つ時期、親は子どもの関係と夫婦間の関係を再構築することが課題
- 怒 り … 欲求の充足を阻害されたときのフラストレーションによって生じる感情
- 嫌 悪 … 自分にとって排除したり避けたい対象や出来事に対して生じる感情

<発達障害…特別な配慮>

- ASD(自閉症スペクトラム障害)、ADHD(注意欠陥多動性障害)、SLD(限局性学習症、ディスレクシアなど)
- ・発達障害は脳の器質的な問題であるとされている
 - ・まず保護者との情報共有と信頼構築 と 子どもへの具体的支援 が優先
 - ・問題行動への対応として、行動の前後の反応を観察する行動分析による手法が有効

○専門職同士の間で問題解決

- コンサルタント … 提供する側の専門職
- コンサルティ … 受ける側専門職

- 妊娠1ヶ月
 - 妊娠0週
 - 妊娠1週
 - 妊娠2週
 - 妊娠3週
- 妊娠2ヶ月
 - 妊娠4週
 - 妊娠5週
 - 妊娠6週
 - 妊娠7週
- 妊娠3ヶ月
 - 妊娠8週
 - 妊娠9週
 - 妊娠10週
 - 妊娠11週
- 妊娠4ヶ月
 - 妊娠12週
 - 妊娠13週
 - 妊娠14週
 - 妊娠15週
- 妊娠5ヶ月
 - 妊娠16週
 - 妊娠17週
 - 妊娠18週
 - 妊娠19週
- 妊娠6ヶ月
 - 妊娠20週
 - 妊娠21週
 - 妊娠22週
 - 妊娠23週
- 妊娠7ヶ月
 - 妊娠24週
 - 妊娠25週
 - 妊娠26週
 - 妊娠27週
- 妊娠8ヶ月
 - 妊娠28週
 - 妊娠29週
 - 妊娠30週
 - 妊娠31週
- 妊娠9ヶ月
 - 妊娠32週
 - 妊娠33週
 - 妊娠34週
 - 妊娠35週
- 妊娠10ヶ月
 - 妊娠36週
 - 妊娠37週
 - 妊娠38週
 - 妊娠39週